



私を見て



神奈川 竹内 唯

友達のハンカチを隠したことがある。それは小学校低学年くらいのころだ。当時極度の人見知りだった私は、クラスメイトとまともに話すことができず、いつも一人ぼっちだった。時々話しかけてくれる子は何人かいたが、私が「うん」しか言えないことを知ると去っていく。自分が変わらなくてはいけないことは分かっていた。だが、あまりの孤独に耐えられず、周りの同級生を敵視することでなんとか自分を保っていた。

「何の本読んでるの？」

ある日の休み時間、いきなり声をかけられた。戸惑いながら本から目を離し、相手を見上げる。驚いた。そこにいたのは、いつも一人でいて大人しめの、私の鏡のような女の子だったのだ。私はいつも通りの人見知りを発揮し、不愛想に、読んでいた本の題名を告げた。そこで会話終了、のはずだったのだが、どうやら本の趣味が同じだったらしい。この本がいかにか素晴らしいかということを切々と語った後に、友達になろう、とまで言ってきた。私は相変わらずうなずくことしかできなかったが、とびあがりたいほど嬉しかった。もう、一人にならないですむ。私には彼女が天使様のように見えた。

それからどんどん仲良くなっていき、彼女にだけは何でも話せるようになった。あんなに苦しかった昼休みや移動教室の時間が、一番幸せな時間へと変わっていく。

「進級しても同じクラスになれるといいね。」

私たちはそう、語り合った。語り合ったのだ。

前兆はあった。昼休みになって、いつも通り一緒に図書室へ行こうとしたら、教室に彼女の姿がないのだ。先に行ってしまったのかと思って急い

で向かい、図書室の窓から中をのぞきこんだ。彼女は、知らない女の子と仲むつまじげに話をしていた。心臓がドクンと跳ね上がる。大丈夫、きっと今日だけだ。そう自分に言い聞かせながら、足早に教室へ戻った。しかしその日から、彼女の態度は急によそよそしくなった。一人でいる時間がどんどん増えていく。まるで、あなたなんか存在していないのよ、と言われていたようで、ものすごい恐怖が私を包んだ。嫌だ、行かないで。私を見てよ。もう、耐えられなかった。気がつくと、私は彼女がお気に入りだと言っていたハンカチを手にし、ポケットにつっこんでいた。これでまた、私に興味を持ってくれるかもしれない。また一緒にいられるかもしれない。頭はそのことで一杯だった。

少し前まで私の「友達」だったはずの人は、泣きながら私のことをにらんできた。担任の先生はしきりに、どうしてこんなことをしたのか、とたずねてくる。わからない。もう、何もわからない。ただ一つ明確なことは、また一人になった、ということだけだ。私は、いつのまにかしわくちゃになっていたハンカチを彼女に返し、三回ぐらい「ごめんなさい」を言った後家に帰った。予想通り、玄関には母が立っていた。どうせ怒られると思ったから無視して通り過ぎようとする、急に抱きしめられた。母が泣いている。わけがわからなくなって、思わず私も泣いてしまった。

「母さん、唯のこと大好きだから。だから、大丈夫。」

母はそんな照れ臭いセリフを、私に浴びせるように言い続けた。何が大丈夫なのかはよくわからなかったけど、なんだか私の心は軽くなった。明日、心をこめてちゃんと謝りに行こう。そして、話したいことを話そう。私は深く、そう思った。

なぜ人は罪を犯してしまうのか。私は孤独が原因だと考えている。人は寂しさに弱い。なのに、必死でその気持ちから目をそらしてしまう。そうやってたまりにたまった孤独感が、人を誤った方向へと導いていくのだ。だから私たちは、被害者の悲鳴だけでなく、加害者が必死であげた悲鳴にも耳を傾けなくてはならない。その悲鳴を無視したが最後、人はまた「孤独」という名の重圧に押し潰され、「加害者」へと姿を変えてしまう。そんなこと、絶対にあってはならないのだ。

私たちはもっと、お互いを気にかけるべきなのだと思う。困っている人を助けたり、一人でいる人に声をかけたりするなど、小さな努力を一人一

人が積み重ねていけば、人の輪は必ず生まれる。そうして孤独を感じる人は減っていき、犯罪や非行もなくなってゆくのだ。

私は、母に救われた。あの時母が私のことを見てくれなかったら、同じ過ちを繰り返していただろう。私も誰かのために涙を流し、あなたは大切な存在だから、と優しく伝えることのできる人になりたい。そして、心から願う。この世から犯罪や非行がなくなり、全ての人が手を取り合える「明るい社会」を。